引き続き、立命館生協へ期待・要望をお寄せください→

大学生協アプリはじまる！

できること 1
レジでスマホ画面を呈示
サッとかんたん！

できること 2
生協電子マネー・ミールシステム
スマホ決済
利用履歴や残高も管理できる！

できること 3
ポイント即時マネー化
１円単位で次回のお買い物に使えます。*

＊ 書籍割引 10%OFF は終了し、10% ポイント還元になります。

●クレジットカードから、アプリへチャージの準備も、早めがお得！！

大学生協電子マネーへ三井住友カード（NL）にてクレジットチャージで最大20%をキャッシュバック!!

特典
ご利用金額の最大20%をキャッシュバック
※1会員あたりの還元額上限は1,000円までとなります。
※特典金額は小数点以下切り捨てにて算出となります。

期間
2023年2月1日（水）～4月30日（日）

対象カード
三井住友カード（NL）
※三井住友カード ゴールド（NL）は、対象となりません。
※Mastercardブランドも対象となります。

条件
対象カードにて大学生協電子マネーへのクレジットチャージ利用
※クレジットチャージ1,000円以上が対象となります。
※大学生協アプリ内でのクレジットチャージが対象となります。
各大学生協店舗でのチャージは対象となりません。

特典付与時期
2023年7月請求明細書にてキャッシュバック

ご注意事項
- 当キャンペーンは予告なく変更・終了することがございます。
- アクセス集中やメンテナンスなどにより特典の付与が遅れる場合がございます。
- 当キャンペーンにかかわる情報は弊社で管理し、特典付与の目的に限り利用いたします。
- 本施策は全国大学生活協同組合連合会傘下の大学生協事業連合が提供する大学生協電子マネーが対象となります。

年会費無料

RUC

発行／立命館生活協同組合理事会
編集／立命館生協 RUC 編集委員会
京都市北区等持院北町 56-1
TEL.075-465-8280
URL https://www.ritsco-op.jp/
2023.4

R CO-OP

特別号

2030 Goals

2030Goals

立命館生協では2023年５月に「2030Goals」として未来へ向けての新たな運動方針を策定します。

これまで「つながり・交流」「学び・成長」「健康・安全」「立命館に貢献」「社会に貢献」という５つのポイントで、組合員アンケートやインタビューなどでたくさんの声をお寄せいただいております。

また生協理事会での検討の際に、新たに「平和」も大切なポイントだということで、現在６つのポイントで組合員のみなさまからご意見を集約しているところです。

このRUC 2030Goals特別号では、これまでにお寄せいただいている声や生協理事会での検討状況、インタビューをまとめております。さまざまな声をご覧いただき、より一層組合員のみなさまの未来へ向けた創意にあふれるご意見をお寄せいただきますようお願いいたします。

巻頭インタビュー

立命館大学 仲谷 善雄 学長 × 立命館生協 学生委員会

SDGs 大学の食育

食の循環 衣笠モデルと中山間地域課題

産業社会学部 景井 充 教授

地域連携課 大場 茂生 課長（前）

大学の学びインタビュー

薬学部 近藤 雪絵 准教授

経営管理研究科 水野由香里 教授

平和について考える

立命館大学国際平和ミュージアム

吾郷 眞一 館長 インタビュー

わくわくする 未来の立命館生協を考える

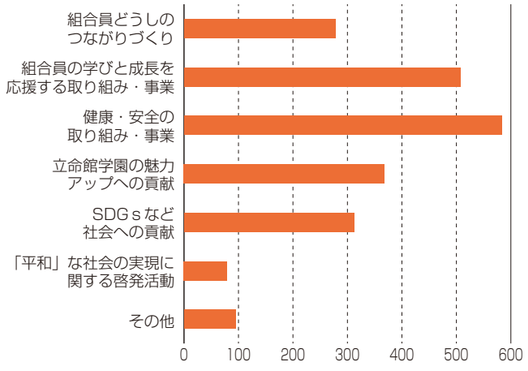
立命館生活協同組合 | SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

私たちは持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

2030Goalsアンケート集計

今年の５月から取り組んでいる組合員アンケートのまとめの一部をご紹介いたします。今回のアンケートでは、主に「立命館生協に期待すること・大切にしてほしいポイント」と「現在の立命館生協でいいなと思っているポイント」についてお聞きしています。

立命館生協に期待すること・大切にしてほしいポイントについて



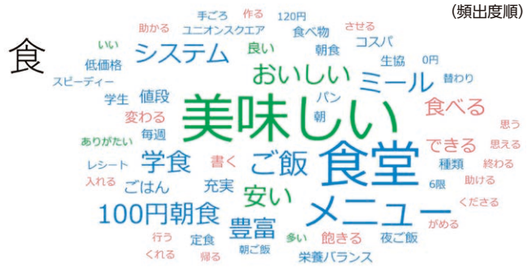
※10月調査学調独自アンケートデータ含む
※平和については10月調査分のみデータ
※「平和な社会実現に関する啓発活動」については、10月調査分データのみ。

「健康・安全」と「学びと成長」への期待

組合員の多くが健康・安全への取り組みについて期待を寄せていただいています。特に、健康については食生活面を生協食堂で引き続き支えてほしいという声が多く寄せらせています。また、学びへの支援については教科書・書籍の販売への声や「さまざまなサポートがあっていろんなことにチャレンジできる」「学生の生活や学習、資格取得等の支援をしてもらいたい」の声がありました。また、環境への取り組みや大学の魅力アップへの期待も声も多く寄せられています。

現在の立命館生協でいいなと思っていること

（頻出度順）



生協理事会議論状況報告

生協理事会では、毎月「2030Goals」策定にむけた議論をすすめています。コロナ禍の生協経営は厳しく「再生・再建」という視点は持ちつつも、組合員の「暮らしと学びを支える」役割発揮のためのビジョン議論です。集まっている組合員のみなさんの声・インタビューやヒアリングで聞こえてくる要望、各種アンケート結果など共有しながら議論をすすめています。

●食堂メニューの多くは、２月末まで価格据え置きで頑張ります！

アンケートの中では、生協メニューや、ご当地企画などへの評価の声もたくさんいただいており、引き続き「食」や「健康安全」に関するイベントを通して、組合員の生活を支える活動を発展させていきます。

特に、物価高騰等の社会情勢は、組合員の生活にも影響が出ています。生協の仕入れ原価にも関係してきますが、食堂定番メニュー（事業連合統一メニュー）の多くに関しては、２月末までは、現在の価格据え置きで、組合員の「暮らし応援」をすすめます。ぜひ生協食堂で、お得にご利用ください。（購買商品や、一部メニューは秋からの価格改定をせざるを得ない部分はあります。ご了承ください。）一方、３月からは若干値上げが必要になることをご理解ください。理事会議論の中では、「価格は改定せずに、全体の量を減らす方法」なども提案がされましたが、大学生に必要な栄養とエネルギーをきちんととっていただきたい議論も平行してすすめております。

また、ハラル・ヴィーガン・ベジタリアンなど、「食」の多様化への対応も、少しずつ進めていますが、引き続き発展させていくも議論もすすめています。

●平和・環境・SDGsという活動への期待の声もたくさん届いています。

「環境問題は一人ひとりが意識していかないといけない」「SDGsなど社会貢献は、私達が社会のためにやるべき」等の声も集まっており、生協としても、事業活動をすすめながらも、ペットボトルやプラスチックゴミの削減を実現させる活動をすすめます。プラスチックスプーン等は、木製に変更を進めています。お弁当容器（丼ぺり）の回収率を高めリサイクルするという活動は、組合員のみなさんの協力も必要です。まわりのお友達にもご紹介いただき、活動へ参画いただきますようお願いします。

●１月からは、「アプリ決済」

現在も９割の方には、生協電子マネーのご利用・ご協力をいただいています。2023年１月からは、現在の「カード型電子マネー」から、「スマホアプリ決済」に変更となります。秋より先行実施している東京地区の運用状況を確認しながら、準備をすすめています。理事会の議論の中では、「時代の変化に合わせて、とても良いと思うが、組合員のアプリ登録がしっかりと進む計画ができているか。」等の発言もあり、「アプリ登録キャンペーン」企画や、宣伝計画についても議論がされています。

「色々な電子マネーを利用できるように検討できないか」との声もいただいていますが、たくさんのカードを使えるようにすればするほど、レジの混雑が発生します。短時間の昼休憩で、多くの組合員が食事を済ませ、次の授業へ行けるようにするためにも、組合員のみなさんの協力も必要です。スマホアプリによる、「電子マネー＆ミールシステム」にも引き続きご協力をお願いします。アプリ登録手続きはお早めにお願いします。

インタビュアー　理工学部２回生　松本 浩輔　文学部２回生　杵築 一流　総合心理学部２回生　城 ほのか　総合心理学部２回生　鈴木 英

巻頭インタビュー

立命館大学　仲谷 善雄 学長　×　立命館生協　学 生 委 員 会

ワクワクする立命館大学・立命館生協を

学生同士・学生目線でグローバルな取り組みを期待します

城　わたしたち生協学生委員会の活動はご存じでしょうか？

仲谷学長（以降学長）　もちろん知っています。学生のニーズを把握したり、アンケートを取ったり、いろんな企画で学生を巻き込んで意識向上をしていただいている団体です。

城　生協学生委員会にどういったことをがんばってほしいと思われていますか？

学長　いくつかあるんですが…。今、グローバル化が進んでいろいろな食文化の人が来ていますよね。立命館大学は全国の中でも６番目くらいに留学生が多いんですよ。短期留学生もいれると4000名くらい。その人たちが本当に食べられるものを生協でやっているかというとちょっと足りないところがあるかなと思います。私が研究室を持っていた時、イスラム圏からの留学生はハラルでコンソメなどは食べられない。歓迎会でお菓子を買うときなど、成分表示を見る習慣ができるんですよ。やっぱりそういう側面からの国際化が立命館大学だけでなく全国の大学で必要だと思っています。

生協にも長年お願いしていて進んできたところもありますが、まだまだ私は足りないと思っています。そういう製品開発、商品開発というものを学生目線でもやってほしいです。

また、大学院生が多いということもあるのかもしれませんが、留学に来て日本人とコミュニケーションが取れていない部分があります。そうなったときに彼らのニーズを誰が吸い上げるのか？大学としてもそういった場を設けていきますが、学生は学生同士としてそういったことをがんばってほしいと思います。

鈴木　先日ちょうど留学生向けの企画を行いまして、食堂で食事をしたんですが、やはりイスラム教徒の学生がいました。それまでは留学生向けの企画ができていませんでしたが、今回の企画でニーズを把握できたのでメニューの開発もそうですし、今あるメニューの中でどれが食べられるかなどの工夫は学生のところでもできるかなと思いました。

学長　APUだとアジアウィークなど国ごとのウィークがあってみんな楽しんだりしてますよね。堅苦しいものではなくて「みんなで楽しもうよ」と、その中で「これは食べないんだ」とか「確認してみよう」とか思うでしょう。例えばインドでは全員が牛を食べないわけではなくて、OK大好きという人もいます。ヒンズー教徒もいろいろあると言われます。ちょっとした気遣い、文化の差に対して敏感になるような風土が大切です。

国際化というのは留学に行くことや英語をしゃべることだけではないと思っています。いろんな人がいるんだなと、そういうダイバーシティにあふれる大学をインクルーシブしていく象徴的な場が生協ではないかと思います。生協はみんなが集まってくる場所です。そういった意識を持てる場がつくれたら楽しいんじゃないかと思います。楽しくやってください。

あとは学生同士で店舗利用の時間配分をうまくしてほしいと思います。現場では工夫されていると思いますが、それでも食堂は混んでいます。お互いしゃべりたい気持ちはわかりますが、食堂でずっとしゃべり続けるのではなくマナーの向上が必要です。

アフターコロナとなっても、食堂の使い方についての注意喚起や利用方法はみなさんから働きかけていただきたいと思います。学生同士で思っていることはたくさんあると思いますので、それを形にするのがみなさんの仕事ではないかなと思います。まずは学生としてどう動くかということを心がけていただければ、それは立命館の文化でもあると思います。

生協食堂のお気に入りは カレーです

鈴木　生協の食堂でお気に入りのメニューは何ですか？

学長　間違いなくカレーです。今、BKCにカツカレーはなくなりましたよね。唐揚げカレーしかないですが、昔はカツカレーがあって私はそれが好きでしたね。復活してほしいです。

鈴木　もともとカレーがお好きなんですか？

学長　そう。もともとカレーが好きです。カレーにはうるさいですよ。

鈴木　そんな学長が生協のカレーをお好きなのは不思議です。

学長　不思議ですよね。昔はバーモントカレーなど普通のものを食べていましたが、1991～2年にアメリカのスタンフォード大学に留学して、住んでいるところのすぐ近くにタイレストランがあったんです。その当時日本にはそういったレストランがあまりなくて、そこに行ったときに目覚めて、エスニックにはまり始めて、インドネシア、ベトナムとかのカレーを食べ比べるようになりました。大学にもタイcafeがあって、激辛のカレーだけどとてもおいしかったです。

そこから日本のカレーでは満足できなくなったんですけど、生協のカツカレーはおいしいなと思って食べていました。

鈴木　光栄です。私はあまり食べたことがなかったんですが、今度食べてみます。

学長　もう少しエスニックにしてもらえると嬉しいです。値段はちょっと上がると思いますけど。

大学時代から 今までのご研究について

松本　学生時代はどのような研究をされていましたか？

学長　私は社会心理をやっていて、三隅二不二先生というリーダーシップの世界的権威の方が教授をされていて、その下に日本文化論の浜口恵俊先生がいらっしゃったゼミにいました。

リーダーシップ論は実験室でガンガン実験をします。実験社会心理学やグループダイナミクスと言われているものです。もう一つは文化心理学で、社会学的な社会心理学、社会調査がベースです。私は３回生からゼミに配属されて学生の意識調査をゼミでやって、こういうのも面白いかもしれないと思い、浜口先生のもとについて「ライフスタイルが親子でどう影響するのか」ということを調査することにしました。

当時はライフスタイルという言葉はマーケティングの世界では出ていましたが、まだまだ一般的ではなくて、しかも親子についてはまだまだ研究されていませんでした。そこで自分の出身高校にお願いをして、生徒さんと両親とに意識調査をして自分で統計プログラムを組んだんです。300行くらいの統計プログラムで、当時はそれを組まないと、データをすべて手打ちで計算をしないといけませんでした。特定のプログラムがあって、それを使いこなさないといけない時代で、なかなか大変でした。

そのおかげでプログラミングができるようになって、就活のときに先生に「三菱電機が、心理学の素養があってプログラミングができて避難行動シミュレーターをつくれる人をさがしているけどできる？」と聞かれてそのまま就職しました。

企画系を狙っていましたが、就活がうまくいかなかったときに声をかけてもらったんです。縁ですよね。

松本　そのあとの研究分野はどのようなことをされていましたか？

学長　大学では「避難誘導にリーダーシップがどう活かせるか」という研究を始めました。避難時に狭い出口から皆が同時に出たい、アーチ状態ができて誰も動けないという時に、どういう声かけをしたらどれだけ多くの人が短い時間で避難できるか、状況を変えながら実験しました。それは友達がやっていたんですが、ゼミでそういう勉強はしていたしいろんな文献も読んでいたので、実験の手伝いをしていました。

企業に入ってからは避難行動シミュレーターに携わりました。そこから防災ということに興味がわいて、今もずっと防災研究という私の研究の柱の一つになっています。現在は、京都市の帰宅困難者対策の長をやらせていただいていますが、京都市ではいざとなったときに自分が考えた方法が実行されます。ドキドキですけどね。

そこから波及して、思い出工学で心の復興支援をしようと思いました。災害時、特に津波などで思い出の品をなくした人の立ち直りがなぜ遅いのか、それは記憶喪失と一緒だなと思ったんです。記憶喪失は物の名前などではなく、ほとんどが思い出を忘れます。思い出は単に振り返るものではなくて、その人のベースとなっていて「こんなところで生まれてこんな経験をしている私」なんですよね。それがなくなると、つらくなって命を絶つ人もいるわけです。

その人が撮った写真ではないけれども他の人が撮った写真とか、昔流行っていた音楽を流したり、昔食べておいしかったものの香りをかがせてあげるとか、情報技術で出来ることで思い出したものについて文字化をしてもらう。それをベースにしてオンライン上にバーチャルなコミュニティづくりや復興計画に盛り込んでそこを重点的に取り組むとか、そういうことができるといいなと思って思い出工学という名前を付けてやり始めました。

それから観光支援、あえて道を教えない観光案内です。私たちの結論としては観光というのは、目的地に行くことではない、非日常の体験ができればよいと考えました。

例えば道を隠せばいいのではないか。実は道の情報はあるんですが不十分で現場をよく見ないといけない状況をつくりだします。そうすると周りをよく見るようになって、ここにこんな面白そうな道があるとか、この人に聞いてみようと現地の人とのコミュニケーションが生まれます。そういった状況をいっぱい作ってみようとやり始めました。これはNHKなどにもたくさん取り上げられました。

（研究内容について具体的で楽しい内容についてたくさんお伺いしましたが、紙面上省略させていただきました。）

これから大学がめざすこと・ 生協・生協学生委員会に期待すること

杵築　2030年にむけていろんな取り組みをされていると思いますが、大学自体はどんなことを目指していらっしゃいますか？

学長　柱は２つあって、「新たな価値を創造する次世代研究大学」と「イノベーション・創発性人材を生み出す大学」です。研究というと論文と思うかもしれませんが、人文社会学系の先生が７～８割を占めるような本学においては社会実装、社会に働きかけるような活動やアーカイブをつくるような活動が大事なことだと思います。

立命館は地域連携や産学協同が活発で、社会の諸課題に対して積極的に働きかけるような、そういう役割を大学が担っています。私学立命館らしいユニークな特徴のある研究活動、知的活動をさらに活発にしていきたいと思います。

そのベースになるのは探求心です。私はこれから人文系でも大学院が大事になってくると思っています。いま日本がいろんなところで頭打ちになっているのは、やはりそういう知的な問題解決、企画をつくる訓練を受けた人が少ないからではないでしょうか。現在は大学院進学率が４割ですので、これを６割～７割まで上げたいと思います。

そして学生の探求心をどう上げていくのか。それは先生方が手間暇かけて、１対１でやり取りするゼミ形式の様なもので鍛えていく必要があります。しかし先生方に聞くと今はとても時間が足りない、しかも大学院生が増えてくるとさらに時間がかかります。先生方がやらなくていいようなことは職員がやるなどして、職員の働き方や意識も変えていく必要があります。次世代研究大学という目標にむけてこういう構造改革が行われています。

大学は博士号を出せる唯一の機関です。大学に求められていることは、高度な専門知識をベースとした知的な人材の育成です。今はそこに至らないままに多くの人が卒業してしまっているのではないかと危惧しています。

また、研究力を図る一つの指標として科研費がありますが、立命館は全体で見て21位です。上位には国立の旧帝大があって、私学で３番目です。立命館はここまで上がってきています。

理系の学生は当然ですが、人文系の学生も研究チームに入ってほしいですね。面白いんですよ、本当に。新しい事、世の中で誰もやっていないこと、誰も考えつかない視点を実際に実現する。これこそワクワクの経験ですよね。私は充実感とか楽しさはワクワク感だと思っています。ワクワク感はいろんなものが見えていないとダメです。どこで何をやっているのかがわかって、「ちょっと参加させてください」というようなことが言えるキャンパスにしてきたいと思っています。「知の見える化」という言い方をしていますが、キャンパスに入ったら、例えばスマホで「どこどこの研究室が路上でこんな実験をやっているよ」とか、「映像学部がこんな撮影をやっているよ」とかがパッと見えると「ちょっと見に行ってみようかな」と思うじゃないですか。そういうことをやろうとしていると学生のみなさんにも知っておいてほしいです。

鈴木　生協学生委員会でもぜひそういう学生のワクワクにつながるようなことをしていきたいです。

学長　一緒に何かやりましょうよ。研究と食堂とか、何かできそうな気がしますね。BKCは食マネジメント学部もありますし。他のキャンパスで活動してもいいですし、いろんなことをまずはやってみることが大事なんじゃないかと思います。

今まで「こんなことをやって大丈夫なのかな」とか「何か言われないかな」ということも多くあったんじゃないかと思います。それだと委縮しますよね。心が委縮したら新しいことはできません。立命館の建学の精神は自由と清新ですから。自由というのは自分を解き放つということです。何から解き放つのかというと、自分を縛っているアンコンシャスバイアスから解き放つんですね。「こんなことしたら何か言われるんじゃないか」とか「これは仕方ないよね」と思うことは、本当にそうなのか？と考えることから始めましょう。生協として本当に大事なこと、やりたいことだったら変えたらいいんです。いろいろそういう制約は考え直していく必要があるんじゃないかなと思います。

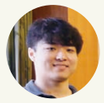
杵築　2030年にむけて大学も進んでいると思いますが、我々生協学生委員会や生協に対して期待していることはありますか。

学長　生協には一つのハブになってほしいなと思っています。生協は学生も先生も集まってくる場所です。日本人も留学生も集まって来ますし、食事をするだけでなく書籍もほかのものも売っています。そういうところでこそ、いろんな交流が生まれると思います。そこが活発になっていないような大学は面白くないと思います。学食がおいしくない大学は大したことないですよ。評判メニューがある大学は活気があります。そういう細部に現れるんです。こんなことを一緒にやりませんか？という発信の場になればいいと思いますし、そういうことで問題意識を持ってもらう。解がなくてもいいんです。世の中誰も解を知らない問題だらけですから。解を持っていなくても、「これどう思う？」でやったらいいと思います。SDGｓもそう。これどうするのと聞かれたら、それを考えるんですよと言えばいいだけの話です。ただ、食べる場所なので肩ひじを張らないというのが大事なのかなと思います。

食べるとは共食です。そういう場は心理学的にも心を開きやすい。初めて会った者同士が一緒に昼ご飯を食べる、あるいは一緒に飲みに行く理由の一つは、それで一挙に心の距離が縮まるからです。せっかくそういう場があるのだから、それを活かさない手はないと思います。いろいろ考えてみてください。

BKC生協
学生委員長
松本 浩輔

今回インタビューの機会をいただいて、私は、先生の研究に対する想いを感じ、同様に立命館のヴィジョンについても熱い想いを話していただけたので、ぜひとも生協もその手助けになれる活動をしていきたいと思います。



衣笠生協
学生委員長
杵築 一流

学長へのインタビューを経て、何事にも興味を持って生きていくことが大切であると感じました。若いうちから意欲的に取り組まないと人生が味気ないものになるので、日々の講義や学生委員会の企画に関心を持ち、自発的な姿勢で臨みたいです。

OIC生協
学生理事
城　ほのか

まず、先生はとても気さくで話しやすい方でした！すごくポジティブな方だなという印象が強かったです。特に興味深かったのは、2030などの今後の立命館についてでした。先生はとても柔軟で、様々な方向性から立命館について考えられていて、学生当人よりも立命館のことを正確に見ておられるなと感じました。今後の立命館の更なる発展が楽しみです。

OIC生協
学生委員長
鈴木　英

今回のインタビューを通して、2030Goalsに向けた学生委員としての展望を明確にすることができました。学長の食に対する考え方を聞き、改めて学生委員としての活動の意義を再確認するとともに、組合員の声を実現したいと思いました。

衣笠キャンパス

大学・学生ととりくむ SDGs・食育

これまで立命館生協では、ゼミや学生団体と一緒に様々な取り組みを行ってきました。衣笠キャンパスでは、キャンパス北部の京北地域の社会的課題に取り組んできた産業社会学部景井ゼミ（京北プロジェクト）と京北の野菜を食堂で提供し、学生のみなさんに食べて地産地消を実感してもらう取り組みをおこなってきました。

2019年に京北プロジェクトは一旦活動が終了されましたが、新たに衣笠キャンパス内でのSDGｓ食の循環の取り組みと京北の中山間地域の課題解決を目指す取り組みが始まっています。

2022年９月初旬に産業社会学部　景井教授、衣笠地域連携課　大場課長にお話をお伺いする機会をいただき、これまでの取り組みや今後の活動について理解するため学習会を実施いたしました。

今の日本が置かれている状況や大学生の食について、食の循環衣笠モデルについてくわしくお伺いしました。（内容はP.7に記載）

また、学内の堆肥づくりの施設やその堆肥を使って食堂でも提供している野菜を栽培しているきぬがさ農園を視察させていただき、学生団体のみなさんに現地をご案内いただきました。

「キャンパス内で発生する大量の落ち葉ゴミを活用しないのはもったいない」と地域連携課に相談に来た学生と一緒に取り組みがスタート。その学生が立ち上げた団体「きぬがさ農園Kreis（クライス）」と地域連携課が協力しながら落ち葉を腐葉土にしてそれが活用できる農園を整備し、現在は学生・近隣の方々・小学生などと一緒に野菜作りを行っています。農園で採れた野菜はキャンパス内の生協食堂で提供をしています。

学生団体「Uni-com（ユニコーン）」と地域連携課のみなさんが生協食堂で消費期限切れになったカット野菜や売れ残った食品など、これまで生ごみとして処分していた食品廃棄物の堆肥化を行っています。この堆肥がきぬがさ農園や今後は京北の農家さんに提供されていきます。

衣笠キャンパス存心館食堂では、定期的にきぬがさ農園で採れた野菜を小鉢メニューにして提供しています。みなさんに食べてもらうことで、食品ロスを資源として循環させるサーキュラーエコノミー（循環型経済）が完結する。新たなSDGsサイクルの構築を目指しています。

９月実施学習会

今、始まっている「食の循環　衣笠モデル」の全体像やこれから目指すことを産業社会学部 景井先生と衣笠地域連携課 大場課長にお話をお伺いしました。

大学生の食や社会問題、衣笠キャンパスでの取り組みについて

大学生の食と今後の京北地域での取り組みについて

産業社会学部　景井　充 教授

農山村の問題や中山間地域がおかれている厳しい状況は東京から見るとどう見えるのか、国レベルの政策や経済構造の中でどういう状況にあるかをいろいろ勉強した中で３点整理すると、

１．大学生の“食の貧困”＝隠れた大きな「社会問題」

ゼミの学生たちが自分たちの食事状況を１週間記録して厚労省の基準と照らし合わせるとまったくだめ。大学の中で学生たちの食育活動をすることは価値がある。大人の責任でこれは引き受けるべきだと思いました。

２．中山間地域の深刻な社会・経済的状況＝「縮小社会」「構造改革」からくる社会問題の最前線

京北地域は緑も多く、一見美しい地域だけど、学生には、あたかも緑の砂漠だと話しています。人口減、一人暮らしのお年寄りだらけ、林業はもう絶望的な状況、雇用の機会がほとんどない…。新たな地域産業がないと中山間地域は持続不可能だということです。在来産業を振興することも中山間地域にとって大事だけれど、新しい産業を興すことことを本気でやらないと日本の中山間地域や農山村は消えていく一方だということに気が付いた。

3. Social Design & Innovationをテーマとする実践的教育活動《Solution Making》の開発

こういう活動をひっくるめて考えると、学生が勉強をする場として提供できるのではないか。いろんな問題があるよねということで終わるのではなく、どうしようかということを大学の学びに組み込んでいかないといけない。どこで仕事をするにしても、プロジェクトでいろんな事業を立ち上げるのが当たり前になりつつある。そういった力をつけてほしいと考えている。

これまで活動していた京北プロジェクトは2019年の12月に終了。2017年１月の段階で教員が大学をフィールドに実験的にやることはやり切った。ここでやめるか、ここから先は事業化するかという２者択一のところまできていた。コロナも少しずつ落ち着いてきているので、いよいよ事業化に踏み切ろうと。

衣笠キャンパスを舞台にサーキュラーエコノミー活動を事業活動として立ち上げたいということで地域連携課にも協力をお願いした。衣笠キャンパスで京北の野菜を食べることが地域支援になる。今始まっていることもあるし、頓挫していることもあるが、２～３年で形になればと思っています。

現在、学生たちが行っているのは落ち葉や食品残渣の堆肥づくりです。有機たい肥が京北地域にいき、有機農業に使ってもらい、洛北の中川で加工してもらって出荷する。そうするとその地域に雇用も生まれます。また、京北地域で取れる鹿肉も加工ができるので鹿肉カレーを衣笠生協食堂名物にしたい。

学生たちにちゃんとしたものを食べてもらいたいです。生き物としてちゃんとしたものを食べてほしいと思っている。水耕野菜は生き物として健康な状態として育っていないので腐り方が汚いんだそうです。本物の野菜というか野菜に力があるものを食べさせたいと思っている。

「食の環境 衣笠モデル」について

地域連携課　大場 茂生 課長

【きぬがさ農園の取り組み】

現在のきぬがさ農園Kreisの初代部長になる国際関係学部１回生の学生が「落ち葉を捨てるのがもったいないとおもう。何かに活用したほうがいいと。」と訪ねてきた。ちょうどごみの総量を減らす取り組みが必要で、落ち葉を集めて保管していた。その時に、景井先生がタヒロンという便利なものがあるということで、腐葉土づくりが始まった。

そして、その学生たちと一緒にキャンパス西の修道院跡を農園に。近所にお住いの教員がご近所に声をかけてくれて、地域の人が参加してくれるようになった。農園で作った野菜を食堂で提供してＳＤＧｓを完成させる。たくさんの人に食べてもらってキャンパス内でＳＤＧｓをぐるっと回せることができた。毎回完売で、食べ残さないという面でも貢献していただけた。

地域連携課の立場からは、多様な世代の交流。相互に理解できる場。ネットワークができた。

【堆肥づくりの取り組み】

生協食堂からいただいている賞味期限切れのカット野菜は、そのまま捨てると焼却処理。水分が約80％でかなりのエネルギーを使ってしまう。温室効果ガスの排出につながる。やりようによれば資源化にもできるし、ごみの減量につながる。堆肥化しようと2020年９月から取り組み始めた。

サーキュラーエコノミー構想で賞は取ったが実装ができていないので連携できないかと学生団体「Uni-com（ユニコーン）」相談があった。彼らは堆肥づくりのプロとネットワークがあるということで堆肥づくりを本格的に始めた。現在は衣笠農園に堆肥を提供している。これから京北農家さんなど学外に出していくためには生産許可、販売許可が必要ということで、京都府に申請して認可をうけた。

【地域連携課として目指すこと】

我々が広げた地域連携のフィールドを教育研究がそのあとを走っていくようでないといけないと思っている。先生方や学生が走っていくというような地域連携のネットワークの広げ方を描きながら、そういうポテンシャルを持った連携になるのかという視点を持って仕事をしていきたい。

生協学生委員　三田寺▶今日話を聞いてわくわくした。バラバラに活動していたのが一つに連携していくことで大きな活動になる。生協学生委員も発信など協力できる。

大場課長▶体験イベントなどを一緒にできそう。京北農家さんが畑作りに来てほしいと。生協組合員企画で以前は行っていたよね。その時は堆肥も一緒に運んでもらえるといいね。

食堂職員　宮崎▶野菜の栄養価などは流通しているものと何が違う？

景井先生▶例えばトマトは水をあまりあげない方がものすごく甘くなる。そうすると粒が小さく数も少なく、農業経営としては市場競争の中では負けてしまう。今日の話も社会的に実装するにあたっての一番のハードルは市場性とどう対決するのか。そこさえ何か手が見つけれられれば普遍的なモデルになる。こういうサイクルをつくるのはスタートが難しいが、今すでに輪になっている。これを学生たちと一緒に参加者を増やすと大きな輪に。

Interview 1 大学の学び

本当に自分が興味あることを追い求めるということは簡単だけど一番難しい。だけど、一番大切だということに気付いてほしい。

薬学部　近藤 雪絵 准教授　インタビュアー／理工学部２回生 松本、情報理工学部１回生 大谷

グローバル社会の現代では、人やモノが自由に行き来し、ネットやSNSを通じて世界中の情報を手に入れたり、自ら情報を発信することが簡単にできるようになりました。そんな中、わたしたち大学生はどのように語学学習に取り組むことが必要なのか、PEP(※1)担当教員でもある近藤先生にお話を伺いました。

大谷　先生は普段はどういったお仕事をされていますか？

近藤　普段は薬学部で英語教員をしています。薬学部所属の英語教員は私一人ですが、生命科学部をはじめとする他の学部や機関の先生たちと協力しチームでPEPのカリキュラムや教材を作ったりしています。また、成果を学会で発表したり論文にしたりもしています。薬学部としては、国際社会でも活躍できる英語での発信能力を育成するというポリシーがあるので、１回生から院生まで継続した英語教育や、海外の大学や施設に学生を連れて行ったりもしています。

松本　担当されているPEPの様子や課題と感じていることを教えてください。

近藤　PEPは薬学部と生命科学部が設立した2008年から実施している英語プログラムです。最大の特徴は、スキルワークショップで英語のスキルを伸ばし、そのスキルを使ってプロジェクトに取り組むという点です。課題としては、自分の好きなことをプロジェクトにして発信するのですが、「自分の好きなことはこれです」ということ自体が難しいという点ですね。本当に自分が興味あることを追い求めるということは簡単だけど一番難しい。だけど、一番大切だということに気付いてほしいですね。

ノーベル賞を取られた真鍋淑郎先生が、カンファレンスで学生からの「私たちの世代にとって一番大切なことは何かアドバイスを」という質問に「I recommend curiosity driven-research.（興味関心に掻き立てられることをするべきだ。）」と答えた、というエピソードがあります。自分の好きなことを見つけるというのは簡単ではないかもしれませんが、なんとなく大学生っぽいから、こういうことが求められているからではなく、自分が本当に興味あることに取り組んでほしいと思っています。

松本　これから取り組みたいことはありますか？

近藤　今年すでにチームで取り組んでいることですが教育改革DXです。一例として３回生のポスタープレゼンテーションをVR空間でやりました。

あと私が特に興味関心を持ってやっているのはライトニングトーク、研究のハイライトを紹介する短い動画の作成です。学生にたくさん作ってもらい、今のうちにオンライン上に残して後から拾える石にする。１・２回生の時はこれからやらないといけないこと＝積む石ばかりを考えるのですが、後から振り返った時にこの石がなかったら積み上げることができません。今はがむしゃらにやっていても、後から振り返るとこの石を残してきたことに気づきます。その石を残すのに今の時代は動画はいい方法なので、たくさん学生に作ってもらうサポートをしたいと思っています。

松本　そのような取り組みが進んでいるのですね。他にもこんなことできたらなということはありますか？

近藤　例えば今、こうやって情理の学生に出会ったから「今度うちの英語プログラムにおいでよ、一緒に〇〇をやろう」というように学部の垣根を越えたコラボレーションができればいいなと感じています。なかなか難しいですが、もっと学部や大学を越えて自由にコラボレーションできたら、もっと面白いことができるのではと思っています。

松本　生協ではどのようなことができると思いますか？

近藤　英語学習に限らずですが、何事も個別化が進んでいるので、コンサルテーションみたいなことができればいいのではと思います。例えば文具コンサル。実験ノートだったら、今までノートを取ったことがない子や、聞ける人がいない子もいるかもしれないので、ノートを売っているところで先輩が「僕はこんな風にノートを使っているよ」と見せてくれて「方眼紙がこんな風に使えるんだ」みたいな。文具やパソコンはもちろん、本なんかも「びっくりするようなミステリーを読みたいんですけど相談にのってもらえますか？」と聞けるようなコンサルブースがあったら面白いですね。そういった人と経験を繋ぐ場が生協で提供できたらいいのではと思います。

松本　そんな場所があると学生にとってもいいですね。少し話題が変わりますが、先生おすすめの英語学習法はありますか？

近藤　あります！生協でもやっているじゃないですか、ビブリオバトル(※2)！ビブリオバトルは本を通じて、自分の好きを他者に伝えること、他者の考えを聞いてその本やその人を知ることができます。１つの本を５人読めば５通りの考えや気持ちがあり、それをシェアできます。私は英語でビブリオバトルに2014年から携わっていて、またぜひ企画にしたいと思っています。

松本　英語でビブリオバトルすごいですね。ちなみに僕もそうですが英語に自信がない人たちはプレゼンやビブリオバトルは少しハードルが高いかなと思うのですが、そういう人たちへアドバイスはありますか？

近藤　アドバイスというかマインドの話になるのですが、自分が何かを発信するということを、何かができるようになってから…と待たない方がいいですね。今、自分が持っている力で何かをする技能を伸ばすことを考えた方が手っ取り早いし、同時に伸びていく感じがします。

松本　それでは最後に、英語を頑張りたいと思っている学生にメッセージをお願いします。

近藤　（今まで一生懸命勉強してきているから）みんな英語できているよ、できているから心配しないで英語を使ってね、ということですね。みなさんは学生で近くに先生がいるので、ぜひ先生をたくさん頼ってくださいね。

※１）PEP…プロジェクト発信型英語プログラム（Project-based English Program）は、立命館大学生命科学部・薬学部・スポーツ健康科学部・総合心理学部で実施されている正課英語プログラム。学生が自分で興味・関心を持つテーマを追い求め、それを英語で発信しディスカッションすることで、英語を駆使してグローバルに活動できるコミュニケーション力を段階的に身につける。

※２）ビブリオバトル…お薦め本の魅力をプレゼンし、聴衆にどれだけ読みたいと思わせたかを競い合うゲーム形式の書評合戦。

Interview 2 大学の学び

研究から教育のための教科書へ 教科書は自分の勉強に役立つということを知ってほしい

経営管理研究科　水野 由香里 教授　インタビュアー／経営学部2回生 田中空良、横山陽向、近藤智有　生協職員 川島

普段から生協をよくご利用いただいている水野先生に、現在のご研究や著書本について、また生協への今後期待することをお伺いしました。著書本執筆の裏側のお話をお伺いした学生が終了後「もっと勉強をしたいと思いました」と学習への意欲が高まった１時間のインタビューでした。

近藤　先生は本をたくさん出版されていますが、先生の研究テーマはどういうことをされているのですか？

水野　「ものづくり中小企業のイノベーション」がテーマです。1冊目に出した本では、ネットワークが機能する仕組みを作ると、大変だけれど1社ではできない大きなことができるようになると指摘しています。「早くいくならひとりで行け。遠くへ行くならみんなで行け」の論理がまさしくそうで、機能するネットワークをつくることはすごく大変ですが大事です。この研究で中小企業研究奨励賞をもらいました。

次に、そういった企業がどのように新しい事業を展開していくのか。今持っている情報をもとに新しい技術をつくったり、自分たちが持っている技術を異なるお客さんに展開したりという「今持っているもの」を活かした展開の仕方を2冊目でまとめました。

そして、３冊目は企業がどういうタイミングでそのような気づきを得たのかがテーマです。逆境や市場環境が大きく変化したことなどがきっかけとなって新しい事業展開に結びついていることが少なくないのです。企業が転機をどうマネジメントしているのかについて書きました。

とりあえず３冊の研究書を書いたから、今度は教科書を書こうということで、４冊の教科書を書きました。

『経営学の基礎知識』では、経営学の基礎を学ぶために、普段何気なく接している現象、例えばコンビニにはとても深いビジネスモデルがあることを理解するところから、企業経営や組織、モチベーションの理論を学んでいきます。一般的な教科書と逆で、みんなの身近なところから入っていくのです。

また、『エビデンスから考えるマネジメント入門』は、偉人と言われる人たち、マイケル・ポーターだったり伊丹敬之だったり野中郁次郎など、すごい人たちがどんな学術的バックグラウンドを持っていて、どんな問題認識でデータセットをそろえ、どんな結論を導き出したのかを詳しく書きました。読者が研究する時の型を知ってもらうという教科書です。

つい最近出したのが『ケースメソッドの教科書』というもので、ハーバード・ビジネススクールの教育手法を解説したものです。ケース教材を使ってディスカッションをする授業法の教科書で、ケースを使って研修するためにどう準備するのか、ケース教材を書くということはどういうことかについてまとめています。

ゼミではケース教材を書いてから、修論に取り掛かってもらいます。学生によってはケース教材を学術的研究にしていくことができ、学習の締めくくりができるのです。

川島　以前は授業でデバイス（パソコン）がなくても受講できていたが、コロナ禍でデバイスが必須に。今後、授業形態が変化していくことがあると思われますか？

水野　コロナが流行する前にアメリカなどの海外の有名な教授の授業を受ける仕組みが流行りましたが、普及はしませんでした。結局、オンラインでずっと授業を聞くのは結構苦痛です。2回目あたりまでは受講するものの、続かない…ということになり、定着しませんでした。なので、インタラクションがあればあるほど対面の方が望ましいとなったのです。

今は、文科省の規定上、対面が基本になり、キャンパスに来る人が増えるとエレベーターに乗るのに時間がかかるとか、通学時に混雑するという弊害もありますね。ただ、マスプロの授業は対面の意味がない部分も。授業する方も受講する方も苦痛になってきているよね。

川島　生協へ今後期待することはございますか。

水野　利用分散ですよね。まずそこが短期的には求められている。長期的には大学との連携がとても大切ですね。もともと生協は大学と学生と一緒にというところがありますよね。学生支援という面で一緒に。あと生協の施設が狭いですよね。本の棚も限られていて。もう少しスペースが欲しいですよね。

田中　衣笠書籍店では先生が本を出版されるとトークイベントを開催したりもしています。本を書いた苦労や裏話などもして。他の学部の先生の話を聞いて興味を持ったという感想をもらえたり。

水野　それは良いですね。１科目400名もいる授業の先生のことってそんなに覚えていないでしょ。本の執筆時に３日間なにも書けなかったという先生の苦労を聞くと、「卒論早く取り組まなくちゃ」と思うよね。また、ゼミ生も言ってたけれど、先生によっては自分の書いた本を教科書にするけど、買わされているという感覚が先にあるから、学部生にはそれが自分の勉強にとっても役に立つんだということがすぐに伝わらない。

トークイベントのようなものを開催してくれると、学生に教科書を買ってもらうことの意味が語れるね。それはとても大事。単に出版社の在庫を減らすために売っているのじゃないということをね。自分が書いた本にプライドを持っていて、これを使ってこんな教育効果があることを語りたい教員は一定数いると思う。

逆に、教員に授業で使う教科書のどこがいいのか語ってもらうこともいいね。なぜこの教科書を指定したのか、これで何を学んでほしいのかを伝えたいね。そうすると教科書を売らずに大事にするじゃない。

ドラマ仕立てで展開していく工夫を凝らした教科書もあるのよ。私たちも本から得られる印税は大したものじゃない。本当に学んでほしいと思っている教員が圧倒的に多いので、筆者のことも知って欲しいですね。

平和について考える

この間、2030Goalsを理事会で議論していく中で、平和に対する活動ができてないという意見が上がりました。今後の平和活動を考えていくために、立命館大学国際平和ミュージアム館長にお話をお伺いする機会を設けていただきました。現在はリニューアルのための閉館中ですが、今後の予定なども含めてお話をお伺いしました。

立命館大学国際平和ミュージアム　吾郷 眞一 館長

産業社会学部２回生　三田寺 幹大
文学部２回生　五十嵐 るい　法学部１回生　大藪 束紗

国際平和ミュージアムは平和教育と平和を考える場

三田寺　では、まず初めに国際平和ミュージアムの目指すことや特徴やこれまでの役割り、今後の予定などについてお願いします。

館長　特徴は他の戦争博物館や平和博物館に比べると学術的な裏打ちのある並べ方をしていること。広い意味では人類の歴史を見渡せる、現在起きている事象というものは歴史的にはほんの一部に過ぎないということが分かってくる。そこが特徴の一つです。

役割としては、平和学・平和教育の使命もおびています。今まで見に来る人は小中学生で修学旅行などが非常に多い。とりわけ立命館の場合は附属校が多く毎年来館するわけです。立命館大学全体が志向しているところを一瞬にして体得できる。場合によっては触ることもできるような場を提供しています。

今度リニューアルしてかなり大幅に入れ替えます。説明を新たに加える場合は14歳くらいの中学生が分かるくらいの内容にしようというコンセプトで。とはいえメインのターゲットのひとつは立命館の学生諸君であり、日中戦争で散々な目に遭った中国や、韓国の人たちもくる。そういう人たちにとっても見応えがある内容にしなければならない。平和教育であると同時に戦争と平和を考える場を提供するのが、今までもこれからも課題です。だから単に消極的にただ見て帰るだけでなく、特に若い人たちが生活していく上でやはり押さえていかないといけない過去の記憶と、それを打破するために様々な努力がなされているとの過程をみて「あ、自分にはこういうことができるかもしれない」と少し明るくなって出て行ってもらえるように。戦争の悲惨な絵を見て単に心打ちひしがれて帰るのでなく、心が楽しく明るくなって帰ってもらう。そうしたいところだったのが、ウクライナ問題が起きてしまいました。

せっかくの不戦条約から、20世紀初頭から世界は侵略を国際法違反だと規定してうまく進んできたところにちゃぶ台返しのように軍事力が表にでてきてしまったので担当のところでは弱ったなと言っています。

SDGs「人間の安全保障」が達成されれば戦争はなくなるはず生協の活動自体は広い意味の平和活動です。

三田寺　生協で平和活動がなかなかできていないという話が出ていたのですが。

館長　生協の活動は直接平和と関係ないかもといわれましたが、そんなことはないと思います。例えば以前、生協食堂でメニューに少し余分に払うとその分は途上国の援助に回すというのがあった。これは同じ「食べる」にしても一人で食べるのではない。食べられない人たちや子供たちも一緒に食べているんですよという活動をやっておられた。実はこれは平和活動、運動だと思う。

初代館長の加藤周一先生が言っていたことだが、「鉄砲玉が飛び交うことだけが戦争ではない」と。ヨハンガルトゥングという政治学者が言ったんですが、「構造的暴力」という言葉があって、実際に軍隊が対峙していなくても鉄砲玉が飛んでいなくてもそこに構造的暴力があると人間は自己表現、自己実現できない。人権が抑圧されていたら戦争で殺されるのと同じように人間は死んでいくのだと。単に戦争がないだけでなくてその戦争の根源となる根っこから良くしていかないといけない。そのためには経済、社会、文化協力が必要だと、いう発想なんですね。

それがまさしくSDGs。SDGsは決して戦争やってはいけないということが表に出ているわけではないが、別の国連の言葉を使うと「人間の安全保障」（ヒューマンセキュリティ）というものが達成されたらそれで戦争がなくなるはずということなんです。

ですから戦争をなくすためにはもちろん軍縮とか軍備、核兵器を使用しないとかも必要だが、同時にそういった経済、社会協力があると戦争の根っこから封じていくことができる。そう意味で生協の活動自体は広い意味の平和活動、それ自体がすぐになにかなるということはないが、その一環として意識して活動されることが良いかと思います。

五十嵐　構造的暴力のお話をきいて私は文学部なので文化とか言語について勉強していますが、戦争とか格差とか国同士で起きるときに文化とか言語をはく奪したりすることで平等でないとか、格差が生まれたりするということを普段勉強している中で感じます。自分の国がよければ良いのではなくて他の国のことも助けあうのが大切なんだと、お話をきいていて思いました。

館長　あなたが言われた言語というのは非常に厄介というか。今度のウクライナ紛争でもロシアが盛んに自衛権行使と言っているのはウクライナの東北部分のロシア語住民をウクライナの政権が弾圧している、大量殺戮をしているんだと。実際に文化的な圧力がかかっていることは事実です。それが戦争に導いてしまっているわけです。言語の問題は難しいですね。

大藪　戦争は文化的にも経済的にいろんなことにつながっていくことを実感しました。これからニュースを見る際にもいろんな方向、観点から物事が起こっているということを意識して考えて行こうと思いました。

三田寺　平和ミュージアムが平和について考えるきっかけみたいなものになるんじゃないかと思っています。僕ら３人とも夏に平和学習をしたのですが、平和活動に対する認識などの地域差みたいなものがあると感じています。

館長　その通りですね。私が５年前に館長になった時に、立命館大学の学生であった人が少なくとも一度はみて卒業しなければいけないという風に思って、教養科目でいいから必修にしたいと思ったんですがなかなかそれが難しいんです。せっかくこれだけ良いものができていて皆さん見ないで卒業するのは残念だなということはかねがね機会があるごとに言っています。同じことを言う先生も中にはおられるのですが技術的に難しい。

三田寺　国際平和ミュージアムがアミューズメントのような楽しさ「fun」みたいな楽しさでなくて、討論してみて友達の意外な一面を知れて「interesting」みたいな、興味深いなという面白さを来館した人たちが感じてくれた良いなと思いました。

＼ワクワクする／

未来の立命館生協を考える

集まったアンケートの声やインタビューから「わくわくする未来の立命館生協を考えるワークショップ」を生協学生委員会と職員で行いました。

冒頭に生協副理事長である食マネジメント学部 小沢先生より、大学の学びの今後の可能性についてお話をお伺いしました。

コロナ禍で課題として見えてきたのは「学費と学生生活の見合い」「オンラインと対面での教育効果」「学生のコミュニティが希薄化することへの影響」「積極層と消極層の大きな意識差」であること。そして、今後も「オンラインは継続する（ハイブリッドも含む）」「積極層と消極層の差は拡大する」「学び・コミュニケーションツールは多様化する」というお話をいただきました。

英語力をUPしたいがやり方がわからずできない学生のために学習の手引きができないか？結果でないし楽しくなくなってやる気をなくすと思う。目標をちょっとずらして、自分の好きなことを英語で交流する場（例えばアイドルについて英語で話す）をつくると目標づくりにつながるのでは？

院進を考えている人に対して、入学時から院進を見据えて共済やパソコンのサポートも６年や８年を前提にしたプランを案内したらいいのではないか。情報提供なども含めて支援していく。

そのほか、学びの支援だけにとどまらず「経済的に厳しい学生のための食生活支援」や「情報発信について」など多岐にわたる議論が行われました。

「大学生協」と聞くと、食堂や購買を思い出してくださる人がたくさんいると思います。それら生協のお店は、利用するばかりではなく、組合員のみなさんも企画をつくり、運営する一人として活躍いただけます。今回は、学生委員会のメンバーと生協職員が、生協の教職員理事が一緒になって考えてみましたが、組合員のみなさんのアイデアや要望を、一緒に実現させる人も募集しています。

今までの枠にとらわれない発想で、組合員の大学生活から、日々のくらしまで様々な場面で応援できる生協の事業活動を進めたいという人は、一緒に活動しませんか。

あなたの「ガクチカ」の一つにもなると思います。

立命館生協　専務理事　風折昌樹